
中森警部の苦難

真木 葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

中森警部の苦難

【Nコード】

N3584K

【作者名】

真木 葵

【あらすじ】

ショートストーリー「中森警部の苦難」です。

専ら怪盗を追う警部も、普段は捜査二課の仕事で大忙し。最近の若者の犯罪はだんだんと短絡的思考によるゲーム感覚なそれに脳を支配されて平気で罪を犯す者が増えてきている。警部が若い頃と言えば、もっと己が生き延びるために仕方が無く人が欲望に負けるケースが多かったけれど、最近は生活も裕福で何も不自由なく生きている筈の若い連中が、意図も簡単に墜ちていくのだ。

捕まえた犯人は自分の娘とほぼ変わらない年頃だというのに、何故こつも手がつけられない子供に育ったのか。片親で仕事も忙しく滅多に遊んでやれなかった青子でさえあんなに素直で家事も全部やる立派な娘に育ったのにと、半ば親ばかな思考で溜息すら出そうになった。

壁時計を見ると夜も8時を回ろうとしていたのだが、今日もまだ帰れそうにない。遅くなるから先に寝てなさいと娘に連絡するかと思えばポケットの携帯電話を探っていると…

「やつほー、お父さんー！」

「あ、青子？」

捜査二課のフロアに青子のお元気な声が響いた。同僚も中森警部の娘だと知っているから、仕事の手を休めて青子に向かって笑顔で迎え入れてくれた。そして青子の隣には当然の様にいつも側に居てくれる幼馴染みの姿だった。きつと青子に無理矢理付き合わされたのだろうけれど、警部と目が合うとニツコリと笑って「お邪魔します」と二人で入ってきた。

「お父さん今日も遅いだろうと思って、差し入れ持ってきたよー！」
見るからに大きなお弁当箱を、大きな袋から取り出して机に置い

てくれる。学校を終えて家に帰って、働いている父の為にとせつせと作ってくれたのだろうと思うと、娘のこの優しい性格は本当にどうしたものだろうと感涙してしまいそうになる。

中森警部の同僚や部下たちも、青子がこうして遊びに来るとその時はまるで空気ががらっと変わったようになるのだ。少し気恥ずかしいと思いつつも、これが自慢の娘なのだと言いたい気持ちもある。

「すまないな青子、ありがとう」

「それから、着替えは何処に置いてあるの？お父さん全然帰ってこないんだもん！」

「あ…ああ、ちよつと待っててくれ」

まるで世話女房の様に捲し立てるがそれもいつもの事だった。決してずぼらな性格なワケではないのだが、仕事に夢中でつい帰るのを忘れてしまうのだ。すぐ側のロッカーにしまい込んだ着替えを入れていた紙袋を取り、わざわざ手間をかせかせてしまっている事に申し訳なく思えた。

「警部、良い娘さんですねえ」

「本当ですよ、羨ましい」

まあ確かに誰に似たのか、ちよつと頭に花が咲いた様な脳天気な性格の娘に育ったが、家の事は完璧にこなしてくれるし、何より仕事一筋の父親の為にわざわざこうしてお弁当を持って逢いに來てくれる優しい娘だ。曲がったことも何一つしないし、いつもで隣には快斗が居るから安心も出来る。

「良かったらおにぎりどうぞ、お父さん一人じゃちよつと多いと思うから」

そう言つてタバコと缶コーヒーでスタミナを維持していた若い部下達も、喜んで娘お手製のおにぎりに食らいつく。快斗も一つ摘もうとして「快斗はさつきいっぱい食べたでしょ！」と口喧嘩が始まる様子でさえ、本当に微笑ましく見えた。

「それじゃお父さん、青子帰るね」

「ああ、気をつけて帰るんだぞ。快斗君、よろしくね」
「はい」

二人はみんなに軽く会釈をすると、そのままフロアを出て行った。青子のお弁当を摘みながら窓の外、とっくに暮れた夜空を見上げた。街の明かりは消えることなくずっと眠らない。夜が更ければそれだけ犯罪も増長するのだ。

ブラインドを上まで持ち上げて下を見たら、ロータリーを仲良く歩く青子と快斗の姿が見えた。このまま見ていればきつと快斗が先に警部の視線に気がついて、それを青子に伝えて、二人してこっちに向かって手を振ってくるだろうと思っていた。

けれど父親の読みは見事に外れてくれた。パーカーのポケットに両手を突っ込んでいた快斗が、徐に青子に手を差し出した。青子が左手に持っていた警部の着替えが入った紙袋を持ってやると言いたげに。けれど青子はその手に荷物を渡す事なく、快斗の左手に自分の右手を重ねた。

快斗が素っ頓狂な顔をして青子に「荷物だよ！」って言っている。うな霧囲気がここからでも良く見えた。二人は仲良く見えるのだが、青子の話じゃ快斗はいつも意地悪だと聞かされているのだ。

照れを隠すように後頭部をぽりぽりと搔いて、そのまま二人はまた歩き出す。子供の頃から変わらない、二人が一緒に歩いているその後ろ姿。

いつもほったらかしにしている大事な娘の隣で、いつも青子を護ってくれている幼馴染み。安心だ安心だと思っていたが、だんだんと複雑な思いも過ぎる。

嬉しいようで少しだけ寂しいような、そんな中森警部の幸せな苦難…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3584k/>

中森警部の苦難

2010年10月10日22時55分発行